

2018 JUA/EAU Resident Programme 参加報告

後藤 駿介 (九州大)

言い訳かもしれませんが、泌尿器科医となって数年間九州各地の県立病院で日々外来と手術に追われる生活をしてきた私にとってEAUは憧れるにも至らない遠い存在でした。2017年春から大学院に進学しこれまでとは一転してチェックポイント分子やキメラ抗原受容体T細胞療法などに関する免疫学の研究を始めましたが、そんな時にこのプログラムを勧められ自分の研究分野が世界基準の泌尿器領域でどのような位置付けにあるのかを知りたく、とはいえ論文などの実績に乏しい私としては、言葉は悪いですが半ばダメ元で応募させていただきました。

そのためか光栄にも参加が決まり、極寒のコペンハーゲンに到着しEAUの会場入りした後でさえもどこか現実感がありませんでした。EAUの規模は質・量ともに私の想像を遥かに超えるもので、初日の午前中は広い会場内をうろろするうちに過ぎました。午後のJUA/EAU Joint sessionには迷わず参加しましたが、会場の雰囲気としては日本泌尿器科学会総会の国際パートに似ておりこの辺りで落ち着くことができました。周りが見えるようになり気づいたのはposter sessionで多くの日本の若手泌尿器科医が果敢にプレゼンし、会場からの容赦ない英語コメントと格闘されている姿でした。このような国際学会での発表を無事に終えたとき、独特の高揚感、満足感が得られるのだらうと想像すると同時にこれまで目を背けていた自らの語学力のなさにハッとさせられました。この衝撃は帰国後も深く残っています。

免疫療法関連の話題では、PD-1/PD-L1療法が効いた/効かなかったというフェーズを終え、効かないのは何故か、誰に効くのか、どう予測し治療方針をどう立てるかということに焦点を当てた議論が目立ちました。具体的には単にPD-L1などのチェックポイント分子の発現を見るだけではなく、RNAシーケンスなどを用いたepigeneticな解析や、pathway解析を用いて患者を層別化する手法などが用いられており、まだまだ勉強が足りないと感じました。

いくらでも書いてしまうので詳細は省きますが、コペンハーゲンの美しい街並やRPGの世界に入り込んだような古城巡りなど観光も満喫しました。中でも最も楽しかったのは一緒にプログラムに参加した慶應大学の寺西悠先生、岡山大学の定平卓也先生と飲み歩いた夜です。自分の医局の作法や不満(!?)、泌尿器科あるある話などざっくばらんに語り明かし、日本でまた飲むことを約束して解散しました。

あっという間の初EAUでしたが、国際学会に参加す



学会場 (Bella Center Copenhagen) にて



実際のニューハウンにて

ることの意義や語学力への危機感、泌尿器科医同士の横のつながりのありがたさなど多くを学び感じることができ、かけがえのない経験となりました。次回は是非発表する立場で挑みたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本泌尿器科学会、EAUをはじめ関係各所の方々へ心から御礼を申し上げます。